

『年報』編集委員会からの連絡

編集委員長 庄司 俊作

(1) 『年報』(第32集)の編集作業は、この原稿執筆時点(5月16日)では順調に進んでいる。巻頭の総括的な論文を除く特集原稿執筆の方々からは全員、論文のタイトルと要旨を4月末までに提出していただいた。今後原稿集め、編集委員による論文の読み合わせ、校正を中心とする出版社とのやりとりと一連の作業が続くが、引き続き各位の協力を得、今年度大会までに『年報』が刊行できるよう努力したい。

(2) 『年報』の編集の方法については、かねてから注文があった。本期の編集委員会は、自由投稿を増やすことを懸案事項として引き継いだ。また、昨年度の最後の理事会において、『年報』は編集委員会がもっと裁量を発揮して編集に当たったほうがよいという意見が多くの方から出され、私たち新編集委員も重要な課題として受け止めた。現状は、特集主義で、大会のテーマ・セッションをもとに原稿を集めている。学会の現状を考えれば、今の方法を一気に変えることはかなり困難と思われる。このような現状の中で、4月27日の理事会で新たな意見が出された。詳しいことは触れられないが、いずれにせよ『年報』編集委員会の役割を見直すことが今課題になっているといえる。大きくは学会の内部機構に触れる問題であるし、細かなところでは『村研ジャーナル』との関係をどのようにつけるかも問題となるだろう。現在の私の個人的な意見であるが、しばらく時間をかけて、『年報』編集委員を中心に編集委員会で問題を検討整理する必要があるように思われる。その上で、解決の方向を見出していくことが求められているのである。